

カミュの『異邦人』

——母と祖母の肖像——

青木謙三

序

スタンダールの『赤と黒』や、ドストイェフスキーの『罪と罰』の登場人物に作者のみならず彼の父や母の肖像をうかがえるように¹⁾『異邦人』に作者アルベール・カミュの身内の肖像を、フロイトやクラインの理論を援用して透かし見ることができる。この小論では『異邦人』に祖母と母の肖像がどのように投影されているかを、同時期の作品および遺作『最初の人』を手がかりに、特にムルソーの母（以下ママンとも呼ぶ）とマリーに焦点をあて分析したい。

便宜上、伝記的事実を述べれば²⁾、アルベール・カミュは一九一三年十月七日に生まれ一九六〇年一月四日四十六歳のとき事故で死亡。父リュシアン・オーギュスト・カミュは一八八五年十一月に生まれ一九一四年十月マルヌ戦での負傷が原因で死亡。二十八歳だった。母カトリーヌ・エレヌ・カミュは、一八八二年十一月に生まれ、カミュの歿した一九六〇年、息子に遅れること数箇月にして他界した。カミュは父が二十八歳、母が三十一歳のときの第二子で、第一子のリュシアン・ジャン・エチエンヌの誕生は一九一一年である。

母方の祖母、カトリーヌ・マリア・カルドナは一八五七年生まれ。一九三一年七十代の前半に死去。カミュが十七、八歳のことである。この祖母は九人子供を産み、女五人、男二人が成人した。カミュの母は女五人の三番目、妹にアントワネットとマリー、弟に樽職人のエチエンヌ、鉄道会社に勤めたジョセフがいる。母方の祖父は一九〇七年に歿している。

一九一四年に父が戦死し、カミュの母は息子二人を連れ実家に戻った。母の

弟や姉妹の内、一九二〇年ジョセフ叔父が独立した後も、エチエンヌ叔父だけは未婚のままで祖母たちと同居した。よってカミュは七歳以後、十七歳時結核での入院を経て義理の叔父（叔母アントワネットの夫）の家に移るまで、祖母・母・エチエンヌ叔父・兄との四人暮らしであった。父とは八箇月しか暮らしていない⁸⁾。

『異邦人』は一九四〇年五月発表。カミュ二十六歳の作。祖母はすでに歿し、母は五十七歳である。

I 祖母と母の両義性

A 祖母の両義性

『裏と表』（一九三七）収録の小品「皮肉」は、老夫の物語を老女ふたりの物語で挟んだ構成である。その三話目は現実の家族関係を写したものとかがえられる⁴⁾。そこでは孫が、自分につらくあつた祖母に死期が迫ったとき、心配するどころか反感を捨て切れず、愛情を断固として拒否するさまがえがかれている。

Il n'était pas inquiet. Cette femme l'avait trop opprimé pour que ses premières vues puissent être pessimistes. Et il y a une sorte de courage désespéré dans la lucidité et le refus d'aimer. (II, 21)

孫をカミュとすれば、かれの憎しみないし拒否は、自分たちをしいたげてきた専制的で吝嗇な祖母に向けられているだろう。祖母はカミュの靴の底が減らぬようサッカーを禁じ (PH, 84), 遊んで夕食に遅れると鞭でぶち (PH, 56), おまえは絞首台で死ぬぞと脅し (PH, 81), 夏休みが終えても辞めないと偽らせ未成年のカミュを働きに出す (PH, 250)。

ところでこのひどい祖母に同情する、もしくは彼女を評価する面がカミュにはうかがえる。「皮肉」三話目の老女にも長所が皆無ではない。

Et certes, cette femme ne manquait pas de qualités. (II, 20)

老いとともに失ったものの孫から見て祖母は女王の恰幅 (port de reine) があった (II, 20)。『最初の人』の覚書でもカミュは祖母の権威と力強さ (son autorité, son énergie (PH, 280)) を認め、専制的であったが立ったまま給仕をしたと評価している。

La grand-mère, tyran, mais elle servait debout à table. (PH, 273)

そしてなによりも、奨学生としてカミュを進学させるよう担任のベルナル氏が保護者を説得するべく訪れて去ったあとにやさしくカミュの手を握り締めた記憶がある。

et pour la première fois elle lui serrait la main, très fort, avec une sorte de tendresse désespérée. / 《mon petit, disait-elle, mon petit》(PH, 153)

かくして、カミュにおいて祖母への愛着が、たとえ軽微であれ、あるいはたまにであれ、反感や憎悪と並存する。

B 母の両義性

祖母のみならず母への両義性もカミュにはうかがえる。少年のカミュが世界で最も愛したのはつまるところ母だった。

sa mère telle qu'elle était demeurait ce qu'il aimait le plus au monde (PH, 188)

カミュの存在のすべてを母が知ることが彼の一番の願いなのだが、それはかなわず、彼の唯一の愛はことばを奪われていた。

ce qu'il désirait le plus au monde, qui était que sa mère lût tout ce qui était sa vie et sa chair, cela était impossible. Son amour, son seul amour serait à jamais muet. (PH, 292)

障害ゆえに沈黙し無関心で応ずる母とのあいだには見えない壁 (barrière

invisible) (PH, 60) があって、カミュは母からの愛を確かめえないし、自分の相手への愛をも疑うにいたる。愛を確かめられずとも愛されているのだと彼は達観しようとする。次の一句はしているのか、しきれないのか。

Parce que ce sont ses enfants, elle les aime bien. Elle les aime d'un égal amour qui ne s'est jamais révélé à eux. (II, 25)

あるいは愛を感じないときでも感じているのだと想像する。

l'enfant croit sentir, dans l'élan qui l'habite, de l'amour pour sa mère. Et il le faut bien parce qu'après tout c'est sa mère. (II, 26)

愛され、愛していると直感し、疑念が晴れる瞬間もむろんあったろう。ある日曜の午後、客の女たちに歌を披露し、役目を終えて通りに飛び出す刹那、客の一人がカミュを褒めるお世辞に、頭がいい子ですよと母は答える。振り向いたカミュはその答とお世辞との関係を理解し、母のまなざしから愛を汲み取る。

en se retournant, il comprit le rapport. (...) 《elle m'aime donc》, se disait-il dans l'escalier, et il comprenait en même temps que lui l'aimait éperdument, qu'il avait souhaité de toutes ses forces d'être aimé d'elle et qu'il en avait toujours douté jusque-là. (PH, 89—90)

とはいえ愛の確信は持続せず、不信が常態となったので、実際、ひさびさに母のアパルトマンを訪れたジャック（カミュ）への、七十二歳の母の反応は以前と変わらない。出会いのキスのあと一言語りかけるや通りに面した食堂に戻り、余計者として息子を残し、独りだけの世界にすでにこもった印象である。

elle semblait ne plus penser à lui ni d'ailleurs à rien, et le regardait même parfois avec une étrange expression, comme si maintenant (...) il était de trop et dérangeait l'univers étroit, vide et fermé où elle se mouvait solitairement... (PH, 58—59)⁵⁾

母に対するこの両義性の一項、母への反撥は純粋な憎しみではあるまい。不条理感、悔しさ、恨みをも混じえた複雑な感情のはずである⁶⁾。かりに憤りと名付けるが、カミュの母を描く文章にはそのあからさまな表白はみられない。なるほど、たとえば『裏と表』の断片（以後「断片」と呼ぶ）には、彼が結核にかかった折無関心だった母にたいする憤りが仄見えはする。

elle avait certes marqué une inquiétude—mais celle qu'un être de sensibilité normale porte au mal de tête qui afflige l'un de ses proches. (…). Par la suite encore, elle ne s'occupa pas de cette maladie qui devait durer très longtemps. Ce fut un oncle qui s'occupa de lui, et sa mère n'y trouva pas à redire. (…). Elle n'ignorait pourtant pas la gravité de son mal mais elle promenait ainsi sa surprenante indifférence. (II, 1214)

憤りはしかし、母と自分には暗黙の了解があるので、自分は母の無関心をとがめはしないとの言ですぐさま否認される。

Plus surprenant encore à la réflexion était ce fait qu'il n'avait pas songé à le lui reprocher. Une entente tacite les liait. (II, 1214)

母が病んだ際こちらもまた無関心で応じたが、それはおたがいに相手が不死だと確信していたからだとかミュは言う。

Il n'avait jamais craint qu'elle mourût. C'est ainsi qu'il expliquait sa propre indifférence. Et il faut bien dire que dans le regard de sa mère il lisait la même conviction. Elle portait inconsciemment en elle l'idée d'une commune pérennité. (II, 1215)

かようにこのくだりでは、たがいの無関心は正当化され積極的な意味をあたえられている。けれども、死によってもふたりは分離されまいとの確信は愛をともなうが、分離の観念の単なる欠如は愛をともなわぬのが道理である。次のように続けるカミュはふたつが別物であることを内心承知しているだろう。

Elle doutait que rien les séparât jamais. Elle ne doutait même pas. Elle n'y pensait pas. (II, 1215)

憤りはすなわち否認ないしは抑圧され無関心に擬装されている。カミュは古代の刑罰のごとく母の無関心に接するに無関心をもってする。

以上のように、カミュには祖母と母のふたりに対して両義的感情がみられる。この両義的感情は祖母に対しては憎悪が、愛着というよりは同情に勝り、母に対しては愛が憎悪というよりは憤りに対立するか勝ろうけれども、憤りは無関心の形をとる。対象に即するなら、祖母は悪い面が強く、母は良い面が強いか、良い面が悪い面と拮抗する。憤りが無関心の体裁をとるならば悪い面は良い面の背後に退くだろう。

II 『異邦人』のママンにおける祖母と母

「皮肉」の一話目は青年が、招かれた家の人たちと夕食後、半身不随の老女を放ったまま陽気な映画を観に行く話で、死を覚悟して神にすがる老女の内面、とりわけ老女に対する青年の内面が一人称の語り手の視点から記されている。語り手のフォーカスは青年と老女とその娘の三人にかぎられ、招かれた家のほかのメンバーへの個別の言及はない。その信仰心の面からはカミュの祖母がこの老女のモデルだとはいいがたい⁷⁾。けれどもこの老女もまた、三話目の肝臓を病み吐き気に悩まされ死にいたる祖母に似て、胸が悪くなるからと夕食を抜く。くわえて三話目の祖母の病気は下の孫すなわちカミュにとっては演技であり、床についた彼女の病態も新しい喜劇ないしはより洗練された仮病としか映らず、いわば仮病が死病になったと判断される。

le plus jeune des deux enfants s'entêtait à ne voir là qu'une nouvelle comédie, une simulation plus raffinée. (...) à jouer la maladie, on peut effectivement la ressentir: la grand-mère poussa la simulation jusqu'à la mort. (II, 21—22)

同様に一話目の老女の病も死病という点では演技と捉えられている。

Elle souffrait d'une maladie dont elle avait bien cru mourir. (...) Elle doutait que sa maladie fût incurable, mais l'affirmait pour qu'on s'intéressât à elle (II, 15)

彼女は娘もあり、とりわけ青年がそそぐ老女への屈折したまなざしが、三話目の祖母に注ぐ孫（カミュ）のそれに近い。したがって三話目にみられるような現実の祖母の写しではないにせよ、デフォルメされたかぎりでの祖母が一話目の老女にも表出されているとみてよかろう。ただし『最初の人』には映画館で祖母に字幕を読んでやる思い出は記されるものの、カミュの母については映画に行ったのは四十年間に二三度のことと述べられるにすぎない。母は祖母と同じく字が読めないばかりか耳が不自由で、語彙も祖母よりいっそう限られていたとある（PH, 93—94）。とすれば映画を理解しがたいとの、「皮肉」一話目の老女に関するつぎの記述はカミュの母に当てはまろう。

son ignorance l'aurait empêchée de comprendre le film. Elle disait ne pas aimer le cinéma. Au vrai, elle ne comprenait pas. (II, 16)

つまり一話目の老女には、留守居をするカミュの母のイメージと病床の祖母のイメージとがふたつながら投影されているといえよう。

合成像をつくるこの操作は『異邦人』の草稿にも見出せる。『異邦人』の第一章とかかわる最も古い草稿と『幸福な死』の註で呼ばれる下書きでは、運送業を経営する男が妻を亡くす。妻は四十代で病にかかり五十七で死ぬ。妻を失った経営者の人生は「老いによって不意を打たれた」（avait été surprise par la vieillesse）のである。彼にはふたりの娘と足の悪い息子がいて、妻の甥が肺を病む。家族構成からいって、経営者がカミュの祖父、先立つ妻が祖母、二人の娘のひとりがカミュの母、足の悪い息子がエチエンヌ叔父、妻の甥（現実には孫）で結核に苦しむのがカミュにあたるだろう。死者への冷淡さとその描写はメルソーと酷似する。

On plaignit cet homme. (...) Lui cependant s'habilla du mieux qu'il put. Et le chapeau à la main contempla tous les préparatifs, etc., ce fut tout. (MH, 211)

カミュはここで祖父に自己を同一化して祖母を死なしめ、同時に祖母の若い姿と母を重ねているだろう。経営者の妻は甥の訪問を喜び、自分と甥とは対等だと感じていたと語り手は記す。読む者はかなりの親密さを経営者の妻と甥との仲に想定せざるをえないが、愛する母のイメージをカミュはふたりの関係の場で造形しているとみてよい。また彼女は美しかったので自分がコケティッシュでありうると信じ、華やぎ、存分に生きたという。

Elle avait alors cru pouvoir être coquette, avait brillé et beaucoup vécu. (MH, 211)

コケティッシュとは恋人ができた母にジャック（カミュ）があたえた形容である。

Jacques nota (...) que sa mère s'habillait un peu plus coquettement, mettait des tabliers de couleur claire et même qu'on lui voyait un soupçon de rouge aux joues. (PH, 115)⁸⁾

「皮肉」一話目の老女にカミュの母と祖母のイメージが見られ、老女の娘と陽気な映画を観る青年にカミュの、老女の娘にカミュの母の姿が投影されているならば、『異邦人』のママンがこの老女、ムルソーがカミュ、ムルソーと喜劇映画を観るマリーが母に対応する。すなわちママンも祖母と母との合成像では、との推測が成り立つ。そして、この「皮肉」一話目の老女に対しても青年は両義的感情をいただいている⁹⁾。それらはカミュの祖母と母への両義的感情の合成の投影にほかならず、さらにおなじ両義的感情がムルソーを介しママンに対してもいただかれている可能性が高い。ところで、「皮肉」の三話目にはよく引用される一節、祖母の臨終に心が痛まず埋葬の場で泣きつつも死者への欺瞞

を懸念するカミュの心理を描いた一節がある。

Et s'il s'interrogeait sur la peine qu'il ressentait, il n'en décelait aucune. Le jour de l'enterrement seulement, à cause de l'explosion générale des larmes, il pleura, mais avec la crainte de ne pas être sincère et de mentir devant la mort. (II, 22)

祖母の死を悲しめなかったこの実体験が『異邦人』のママンの喪でのムルソーの反応に部分的にであれ表現されているとみてさしつかえなからう。カミュが母と祖母に抱く両義的感情の否定的一項からみれば、ママンはある面では死んだ祖母、専制的でしまり屋だった憎むべき老婆であり、養老院に入る以前、母とすごしても無聊だったという点では、こちらの愛に無関心な意思疎通の困難な母であろう。その否定的なイメージの強いママンの死に無関心であってもおかしくはない。またすでに引いたように、カミュが母の死はありえないと確信していた場合、ママンに現実の母のイメージが多少出ようと、その死は二重に虚構でしかなく、ムルソー(=カミュ)がママンの死をいっこうに悲しまずとも奇異ではない。母の死は有りえないとのこの思い込みを、ムルソーに自己を投影するカミュは心のあるレベルないし部分で貫いたともいえようが、これも論じたごとく、カミュの側の無関心は母の無関心に対する報復的行為と解せられ、うらには憤りが隠されている。カミュがそれをも了解していることは、ムルソーの無関心を他者の視点から父殺しと同等に置く点などからも察せられる。

カミュが母と祖母に抱く両義的感情の肯定的な項からみればママンは、いささかは同情を寄せるべき死んだ祖母、愛する母の姿をとるのはいうまでもない。

この両義的感情は具体的に『異邦人』ではいかに表出されているだろうか。その否定的な項は、まずは死に顔を見るのをすすめられたムルソーが二度ことわる事実¹⁰⁾、母がいなかったならいかに散策が楽しかろうとの思いに認められる。

je sentais quel plaisir j'aurais pris à me promener s'il n'y avait pas eu

maman. (I, 1133)

また、弁護士に問われたムルソーの、母を好きだが、それは何も意味しない、健全なら誰でも愛する人間の死を望む云々の文句にもあらわれる¹¹⁾。

《Sans doute, j'aimais bien maman, mais cela ne voulait rien dire. Tous les êtres sains avaient plus ou moins souhaité la mort de ceux qu'ils aimaient.》 (I, 1172)

また何よりも経済的理由からママンを養老院に入れたという行為に、吝嗇だった祖母へのカミュの反撥を見るべきかもしれない¹²⁾。

je n'avais pas assez d'argent pour faire garder maman. (I, 1159)

むろん両義性の肯定的な項、母あるいは祖母への愛着と共感も示されている。養老院に着いたムルソーが死んだ母にすぐ会いたいとのぞむ一事からも明らかだろう。

L'asile est à deux kilomètres du village. J'ai fait le chemin à pied. J'ai voulu voir maman tout de suite. Mais le concierge m'a dit qu'il fallait que je rencontre le directeur. (I, 1128)

さらに風景を通しての共感がある。

Je regardais la campagne autour de moi. A travers les lignes de cyprès qui menaient aux collines près du ciel, cette terre rousse et verte, ces maisons rares et bien dessinées, je comprenais maman. (I, 1135)

殺人後の牢獄で母の言葉を思い出し胸に銘記するムルソーにも母へのある種の同一化と共感がうかがえる。

Il y avait plus malheureux que moi. C'était d'ailleurs une idée de maman, et elle le répétait souvent, qu'on finissait par s'habituer à tout. (I,

1180)

Maman disait souvent qu'on n'est jamais tout à fait malheureux. Je l'approuvais dans ma prison, quand le ciel se colorait et qu'un nouveau jour glissait dans ma cellule. (I, 1205)

最後に死に際して最終的な同一化と共感が語られる。

Pour la première fois depuis bien longtemps, j'ai pensé à maman. Il m'a semblé que je comprenais pourquoi à la fin d'une vie elle avait pris un "fiancé", pourquoi elle avait joué à recommencer. (I, 1211)

ただし、殺人によって母との関係に変化が生じるとおぼしく、この同一化は葬儀でのそれとはいささか質を異にするかもしれない。

Ⅲ『異邦人』のマリーにおける母と祖母

総じてマリーは良い母のイメージをたたえる。母と置換しうることは、Barchilon¹³⁾も指摘するように、母の死後すぐにあられ、ムルソーが初めて結婚を思い立つ女性であることから直感的にとらえうる。母の葬儀の翌日、ムルソーと映画に行くマリーは、上述のごとく「皮肉」一話目の老女の娘を介してもカミュの母と連想を組む。マリーとカミュの母との重なりは、マリーの身体部位へのムルソーの関心からも察知しうる。不可能な母の喪の遂行 (élaboration) をムルソーはマリーに転移させるのだと見るピションらは、マリーとの肉体的接触を、胎内生活の喪失を遂行しなければならない (doit élaborer) 乳児の肉体的接触の必要に似た退行的関係とみなす¹⁴⁾。「胎内生活の喪失の遂行」とは何かは不明ながら、ムルソーの、マリーの腹部に関心を置きつつ眠る動作に胎内回帰の欲求をとらえうるのは確かだろう。海中でムルソーはマリーの腹に頭を載せ、その鼓動を聴きながらうたた寝をし、そのあと暑さに水に飛び込み、彼女に追いついて腰に手を廻す。

Sous ma nuque, je sentais le ventre de Marie battre doucement. Nous

sommes restés longtemps sur la bouée, à moitié endormis. (...) Je l'ai rattrapée, j'ai passé ma main autour de sa taille. (I, 1138—1139)

アラブ人を射殺することになる海岸でも、ふたりは脇腹を合せてうたた寝をする。

Peu après, Marie est venue. (...) Elle s'est allongée flanc à flanc avec moi et les deux chaleurs de son corps et du soleil m'ont un peu endormi. (I, 1163)

つぎはいわゆる口唇期に関わるものである¹⁵⁾。ピションらは口唇期固着とスキゾイド＝パラノイド・ポジションをメルソーに当てはめ、母の通夜で彼がたばこを喫いコーヒーを飲むのは母を吸い、飲んだこと、すなわち悪い母への口唇サディズムによる攻撃の象徴とする¹⁶⁾。しかし、ここでは良い母に対する部分欲動としてあつかう。愛する対象が無言ならば、目や口に関心が及んで自然だが、カミュが捉える母のプラスのイメージはその微笑に集約されよう。「肯定と否定の間」での母の微笑はうつくしい。

Ils sont assis face à face, en silence. Mais leurs regards se rencontrent: /《Alors, maman. /—Alors, voilà. /—Tu t'ennuies? Je ne parle pas beaucoup? /—Oh, tu n'as jamais beaucoup parlé.》 / Et un beau sourire sans lèvres se fond sur son visage. (II, 28—29)

ここでの微笑は目で笑ったので唇は関与しない (sans lèvres) と解せなくはない。とはいえ微笑であるかぎり唇が閉じていても口辺はいくらか綻んでいて自然である。唇を崩さないことが口許と微笑をいっそう美しく魅力的にしているともしいう。いずれにせよ『幸福な死』のメルソーが追懐する母も同様の場面でほほえむが、メルソーのまなざしは母の唇に集注している。かりに唇は閉ざされていてもその関与は明白だろう。

Mersaut regardait la bouche lasse de sa mère et souriait. Elle souriait

aussi. Il mangeait à nouveau. (...) 《tu n'as plus faim, disait-elle un peu plus tard.-Non》 (MH, 40—41)

メルソーも、母の死において冷淡であり¹⁷⁾、悲しみとともに母を回想しようとも憐憫は自身に戻ってしまう¹⁸⁾が、母を傍らにしての貧しさには甘美なものがあり、石油ランプを囲んでの母との沈黙の夕食にも、ひとの知らない幸福があったと述べられている。よって彼の母の微笑もやはり肯定的な側面が強いだらう。メルソーの微笑に相手は応じているのだから。

この母の思い出と、今は母に代わりメルソーが暮らす部屋の描写とに続いて週末の日常が語られ、次に章があらたまり、メルソーはマルト¹⁹⁾と映画館に来ている。母の埋葬の記述後ほどなくして登場し、主人公と映画に行く点で『異邦人』のマリーと近似するマルトの描写でも唇と微笑への言及がきわだち、またそれらは神性と関連する。初めて遇ったマルトは、やや長いが整った顔立ちで瞳は金色、唇が完璧にメイクアップされ、化粧をしたどこぞの女神にうつる。

Dans un visage un peu large mais régulier, elle avait des yeux dorés et des lèvres si parfaitement fardées, qu'elle semblait quelque déesse au visage peint. (MH, 54)

映画館でも「彼のまなざしにその弾ける微笑が油のように輝いている神性」(une divinité dont l'éclatant sourire brillait comme une huile dans son regard) (MH, 52) と彼女は形容され、この神性は口許に特化されている。さらに動物の神性のしるしをメルソーはマルトのなかば開いた唇に求める。

il s'assit à côté d'elle et se penchant sur ses lèvres entreouvertes, chercha les signes de sa divinité d'animal. (MH, 61)

ゆえに神性は彼女そのものであるか、もしくはその唇あるいは口の奥底、彼女の内部に存在する。Sarocchiの序文にあるように (MH, 16), 『幸福な死』のなかの女性主人公たち (マルト, リュシル, リュシエンヌ, カトリーヌ) は

未分化のためたがいに交換しうる。マルトと置換可能なカトリーヌは神のように息づく動物がやさしく動く自身の深みへの転落を感じる。

Les yeux fermés, Catherine éprouve la chute longue et profonde qui la ramène au fond d'elle-même, où doucement remue cet animal qui respire comme un dieu. (MH, 137)

またリュシエンヌに最期をみとられるメルソーは、彼女の膨れた唇と、その背後の大地の微笑み²⁰⁾とに惹かれている。

Il regarda les lèvres gonflées de Lucienne et, derrière elle, le sourire de la terre. Il les regardait du même regard et avec le même désir. (MH, 204)

したがって彼がリュシエンヌの沈黙と顔の閉ざされた趣から、知性を欠く美にうかがえる神的なもの (divin) に惹かれても不思議ではない。

Mersault remarqua le silence de Lucienne et l'air fermé de son visage. Il pensa qu'elle était probablement inintelligente et s'en réjouit. Il y a quelque chose de divin dans la beauté sans esprit (MH, 144)

これらのマルト＝カトリーヌ＝リュシエンヌの描写は黙して微笑む神秘的な母のイメージにほかならない。実際、「断片」では、口許ではなく瞳に言及されるにせよ、母に同様の神性があてはめられている。

Il revoyait ce fier(?) visage déformé par les rides et cherchait avec angoisse dans les yeux ronds et noirs les mouvements de ce Dieu qui reposait en elle. (II, 1216)

以上の母に関わる微笑と唇が『異邦人』のマリーにもあたえられている。まず微笑であるが、マリーは最初からカミュの母同様無口であって、頻繁に笑うかほほえむ。海岸で再会したマリーは寡黙でよく笑う。

J'ai retrouvé dans l'eau Marie Cardona, (...) Elle avait les cheveux dans les yeux et elle riait. (...) nous avons nagé ensemble. Elle riait toujours. Sur le quai, (...) je lui ai demandé si elle voulait venir au cinéma, le soir. Elle a encore ri (I, 1139—1140)

また拘留中のムルソーとの面会におとづれ鉄格子をへだてて彼に微笑むマリーは、若さを措けばカミュに向かい合う母を髣髴させる。

Déjà collée contre la grille, elle me souriait de toutes ses forces. Je l'ai trouvée très belle, mais je n'ai pas su le lui dire. /《Alors?》m'a-t-elle dit très haut.《Alors, voilà.-Tu es bien, tu as tout ce que tu veux?-Oui, tout.》/ Nous nous sommes tus et Marie souriait toujours. (I, 1178)

ムルソーと彼に微笑むマリーのふたりの像を裏打ちするように、隣の席に青年と老いた母が無言で見詰め合っているのは意味深い。

Mon voisin de gauche, un petit jeune homme aux mains fines, ne disait rien. J'ai remarqué qu'il était en face de la petite vieille et que tous les deux se regardaient avec intensité. (...) Mon autre voisin et sa mère se regardaient toujours. (I, 1179)

最後に判決の日、傍聴席でのマリーの微笑がある。

j'ai vu son visage un peu anxieux qui souriait. Mais je sentais mon coeur fermé et je n'ai même pas pu répondre à son sourire. (I, 1200)

つぎに自分とマリーのふたりの唇に対するムルソーの固着は、マリーに彼がおさわる、波の泡沫を口にふくみ宙に吹き出す遊びに看取しうる。

Il fallait, en nageant, boire à la crête des vagues, accumuler dans sa bouche toute l'écume et se mettre ensuite sur le dos pour la projeter contre le ciel. (...) au bout de quelque temps, j'avais la bouche brûlée par

l'amertume du sel. Marie m'a rejoint alors et s'est collée à moi dans l'eau.
Elle a mis sa bouche contre la mienne. (I, 1150)

死に際のメルソーが惹かれるリュシエンヌの膨れた唇をマリーがそなえるのは偶然ではあるまい。

Marie est entrée. (...) De l'endroit où j'étais, je devinais le poids léger de ses seins et je reconnaissais sa lèvre inférieure toujours un peu gonflée. (I, 1191)

ところで上述の「肯定と否定の間」において微笑む母を前に息子はタバコを吸いすぎてたしなめられる。

Lui, sur sa chaise, la regarde à peine et fume sans arrêt. Un silence.
《Tu ne devrais pas tant fumer》 (II, 29)²¹⁾

『異邦人』の波の泡を含む場面では、海水の塩辛さが唇の部分欲動と結びついている。この部分欲動は母の breasts や身体には配備されず、対象の口ないし口辺に向かうとともに摂取する対象に向かっているだろう。Gassin²²⁾は、セレストのレストランでメルソーが同席するロボットめいた女を死やギロチンの擬人化とみて、死んだ母親の復讐とかかわらせ、食事を貪り食う彼女を、息子を食べる悪い母と解する。またピションたちの論に依拠しつつ、この女の登場は、母の代理であるマリーとの関係によって喪の仕事を逃避しようとの試みが失敗することを予期させるとし、ロボット女はメルソーが喪を遂行できず死の中に対象を見つけるべく死に身をゆだねはじめる瞬間に現れると考える²³⁾。そして、食事のみか消化と排泄をも取り仕切った祖母を悪い母とみなし、同時に彼女をギロチンと重ねている。口愛期的アナル期的な意味で食べ物とともに悪い対象に侵入され、それを排出できずに内部から死ぬまで迫害されるのがカミュの主人公たちであり、埋葬は汚物としての悪い対象の排出を意味するともいう。

ロボット女との夕食はかように悪い母との食事を象徴しようが、女との同席の前ムルソーはマリーとの夕食をあてにしている。ガッサンのいうごとく良い母と悪い母が対照されているだろう。さてその良い母（マリー）との食事の欲求と唇への関心とはやはり相接する。

je lui ai dit que nous pouvions dîner ensemble chez Céleste. (...) elle avait à faire. (...) devant mon air empêtré, elle a encore ri et elle a eu vers moi un mouvement de tout le corps pour me tendre sa bouche. (I, 1157)

またアラブ人射殺の日、砂浜で寝た後にも、食事と唇への関心が並存する。

Marie m'a secoué (...) il fallait déjeuner. Je me suis levé tout de suite parce que j'avais faim, mais Marie m'a dit que je ne l'avais pas embrassée depuis ce matin. (I, 1163)

このようにマリーは食べ物を子供に与える良い母のイメージを湛える。ただし不思議なことに母にカミュが付与する神性はマリーには見られない。たぶん神性が否定的な面を持つからであろう。そもそも神々しいものは死すべきものとの断絶を前提とする。上に挙げた例では、神性は動物的なもの、知性の欠如、コミュニケーションの不可能性、微笑よりも沈黙につらなっているかに映る。それは沈黙する母を理想化する形容と言える。その意味ではマリーは『幸福な死』の女たちよりも理想化の程度が低い母である。悪い母のイメージと良いイメージが対立する際、悪いイメージの強さと良いイメージの理想化の程度は正比例するだろう。マリーの場合、悪い母は部分的にせよ先に一応は死んでいる。そのぶん理想化を免れたとの解釈は可能であろう。

だが、マリーに悪い母のイメージは皆無だろうか。微笑とは言語によるコミュニケーションの象徴としてプラスのイメージを持ちうると同時に、象徴でしかないという意味では否定面を有するだろう。さらにムルソーはマリーとの結婚を一瞬は考えるにせよ、彼女への愛をみとめず、アラブ人を殺す際マリーを

含め女たちを避けて海岸にもどる。マリーにおける良い母親像も絶対ではあるまい。なお彼女に祖母を見出せるかであるが、マリー・カルドナとはカミュの祖母の名に近い²⁴⁾。

結 語

『異邦人』のママンにはカミュの祖母と母との両義的な合成像の投影がなされている。推するに老耄によってママンを死なしめ彼女の死を悼まないことで、カミュは残酷だった祖母と無関心な母に虚構世界において報復したとの見方がなりたつ。もしくは祖母はすでに死んでおり、その死に対するカミュの実際の無関心で報復は現実におこなわれたがゆえに、祖母の容姿をまとわせた悪い母をカミュは攻撃しているのかもしれない。これもやはり老いによる不意打ちを意味しよう。また祖母を母と見立てることで、実の母を母親失格として否認する心理が働いている可能性もないではない。このばあい祖母は良い面が把握され、母は悪い面であつかわれよう。

別の観点からは、祖母を母とし、現実の母をマリーに割り振る操作で、母へのエディプス感情²⁵⁾の隠蔽と成就が意図されていると解せられる。まずはママンの死によってマリーは母でありえない。つぎに母をマリーに移すことで、母との世代の差を乗り越えうる。さらにママンを排除することで、君臨する祖母から母を自由にし、自分との関係を改善しうる。これは同時に悪い母から良い母を守る手段でもあろう。

ところでなぜ、ムルソーはマリーを避けるのか。ある程度抑圧が働くか、マリーに対しても現実の母への憤りが向くからか。それとも現実とは立場を逆転させカミュに愛をそそぐ母に無関心で応じ、現実での報復を虚構世界でおこなっているのだろうか。すべての理由があてはまってもおかしくはない²⁶⁾。いまひとつ、マリーはなぜ祖母の名前なのだろう。死んだ祖母への追従と母のカモフラージュをかねたものか詳らかにしえない。

以上の考察は、エディプスの三者関係を捨象している。実際には、死んだ父、エチエンヌ叔父、母の恋人が絡まざるをえない。そのばあい悪い母とはこ

これらの男性（のいずれか）と親密な、カミュを排除する母をすくなくとも含むだろう。

註

以降、カミュの脚本小説などを収めた *Théâtre, Récit, Nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962 を略号 I で、同叢書で随筆などを収めた *Essais*, 1965 を略号 II で、*La Mort heureuse*, CAC (Cahiers Albert Camus) 1, nrf, Gallimard, 1971 を略号 MH で、*Le Premier Homme*, CAC 7, nrf, Gallimard, 1994 を略号 PH で示し、それらの後の数字で、その巻の頁をあらわす。なお文の途中からの引用であっても字下げをし、原則として省略記号を冒頭と末尾につかわない。引用内部で省略があるときにのみ (...) をもちいる。引用文中の / は、元のテキストでの改行を示す。

- 1) 拙論「『赤と黒』のジュリアンの父」『人文論叢第42号』京都女子大学人文・社会学会, 1994。「ドストイェフスキーの『罪と罰』」『人文論叢第49号』京都女子大学人文学会, 2001。
- 2) 次を参照した: Herbert R. Lottman, *Albert Camus, points*, Seuil, 1982; Olivier Todd, *Albert Camus une vie*, folio, Gallimard, 1999.
- 3) ; Olivier Todd, *Albert Camus une vie*, op. cit., p. 30. 生後何ヶ月まで父と過ごしたかはエディプスを論じる際に問題となる。メラニー・クラインは『子供の精神分析』(*The Psycho-Analysis of Children*, 1932)の第八章で早期エディプスを0歳時のなかば (the middle of the first year), すなわち生後六ヶ月からとする (Delta 版, 1975, p. 123.)。『幼児の情緒生活についての二, 三の理論的結論』(《Some Theoretical Conclusions regarding the Emotional Life of the Infant》, 1952)においても同様である (*Envy and Gratitude & Other Works 1946-1963*, Delta, 1977, p. 78.)。『羨望と感謝』(《Envy and Gratitude》, 1957)では, depressive position とともに生後第二四半期 (the second quarter of the first year) に生ずるとする (*Envy and Gratitude & Other Works 1946-1963*, op. cit., p. 196.)。カミュに早期エディプスを想定することは十分可能である。
- 4) 三話目の家族は, 祖母, その下の息子と上の娘, この娘の二人の息子で構成され, 幼少期のカミュの家族と一致する。また下の息子の口が不自由で, 上の娘に障害がみられること, 祖母が七十にしていまだ家を支配していたことも現実に当てはまる。
- 5) 草稿にもほぼ同文がある (PH, 266)。
- 6) クラインの視点を取るならば, この反撥は生後数ヶ月のフラストレーションからくる, 母への憎悪・攻撃性の延長とみなすべきものであろう。

- 7) 祖母の不信心については PH, 153-157 を参照。
- 8) 合成像ではないけれども、母と祖母のイメージの一致ないし混同がありうる。すでにみた「皮肉」では、無聊な祖母が子供が現れるや忙しげに振る舞い、実に役者だったとされるされている：Ils tenaient ainsi d'un de leurs oncles une histoire significative. Ce dernier, venant rendre visite à sa belle-mère, l'avait aperçue inactive, à la fenêtre. Mais elle l'avait reçu un chiffon à la main, et s'était excusée de continuer son travail à cause du peu de temps que lui laissaient les soins du ménage (II, 21). 他方、「断片」末尾には、子供のころ帰宅して暗闇で床を見詰める母を驚かせたとあって、暗闇になすこともなくたたずむ姿は祖母を想わせる。のみならず、カミュは母をも役者と感じていたと補う：Cette indifférence à toute chose, cette non-pensée qui se nourrissait du sentiment confus d'une rude(?) existence, c'était à la vérité ce qu'il avait découvert chez sa mère, un soir où, tout enfant, il l'avait surprise dans le noir fixant anormalement le parquet (...). Il revoyait le visage animé du feu d'une conversation indifférente, il éprouvait combien les autres la sentaient vivre et il s'étonnait de ce que lui la sentit si peu vivante presque comédienne (II, 1215-1216).
- 9) 青年は病気の相手にいくぶん同情を示すものの、その中途半端な同情に居心地の悪さを覚え、かつ草稿では老婆がその娘にそそぐまなざしに作者は残酷さを付与する：Et la vieille se taisait, en attachant sur sa fille un long regard chargé de reproches, plus cruel que des injures (II, 1185). さらに、出かけたいのに手を離さぬ老婆に青年は憎しみをおぼえ、暴力を加えたい衝動がうごく：Une seconde durant, il eut une haine féroce pour cette vieille femme et pensa la gifler à toute volée (II, 17). 物語に即するならば、この憎しみは、老婆の不幸に巻き込まれることへの嫌悪、あるいは生半可な同情がもたらした状況の責任が自分にあることへのいらだちが外に向いたものかもしれない。が根本は三話目同様、専制的だった祖母への反撥だろう。老婆に残酷さが点ぜられる所以である。
- 10) 一度は守衛に：A ce moment, le concierge est entré derrière mon dos (...). Il s'approchait de la bière quand je l'ai arrêté. Il m'a dit:《Vous ne voulez pas?》 J'ai répondu:《Non.》 (I, 1129). 二度目は所長に：《(...) Voulez-vous auparavant voir votre mère une dernière fois?》 J'ai dit non (I, 1133).
- 11) 肉体の欲求が感情を乱すたちで埋葬の日は疲れ果てて眠たく、周りがわからなかった、確かなことはママンが死ぬのは望まなかった、と付け加えてもこの明言は取り消せまい。愛するものの死を願う心理は、事後的にかつクライン理論から見れば「喪とその躁うつ状態との関係」(《Mourning and its Relation to Manic-Depressive States》, 1940) に述べられるごとく愛するものが死んだ折多少感じられる勝利感とかかわるだろう *Love, Guilt and Reparation & Other Works 1921-*

1945, Delta, 1977, p. 354.)。

- 12) ムルソーは裁判でも同じ理由を挙げる：Il m'a demandé pourquoi j'avais mis maman à l'asile. J'ai répondu que c'était parce que je manquais d'argent pour la faire garder et soigner (I, 1188). ちなみにサラマノ老人は保健所から引き取る犬に金がかかるのをこぼす。レイモンがアラブ女を攻撃するのも原因は金である。サラマノ老人と犬、レイモンとアラブ人の女、ムルソーと母との三つのペアの平行関係はつとにピションたちが論じている：Pichon Rivière et Willy Baranger, 《Répression du deuil et intensifications des mécanismes et des angoisses shizo-paranoïdes (notes sur L'étranger de Camus)》, *Revue française de psychanalyse*, t. xxiii, mai-juin, 1959, p. 416. 悪い母への物理的攻撃は犬とアラブ女に対する虐待に表現される。便宜上ピションたちのこの論文の略号を RD とする。
- 13) José Barchilon, 《Profondeur et limite de la psychologie de l'inconscient chez Camus: les jeux du narcissisme》, CAC5, 1982, p. 29.
- 14) Il ne se sent en contact avec elle que s'il la touche. Cette relation de caractère régressif est semblable au besoin de contact physique du nourrisson qui doit élaborer la perte de la vie intra-utérine (RD, p. 413).
- 15) カミュの seins への関心を『カリギュラ』と『異邦人』にとらえた Jean Grenier はカミュの「フロイト的固定観念」 (*Albert Camus Jean Grenier, Correspondance 1932-1960*, nrf, Gallimard, 1981, p. 51.) と呼ぶ。実際次のような描写もみられる：Je l'ai aidée à monter sur une bouée et, dans ce mouvement, j'ai effleuré ses seins (I, 1138).; Le soir, Marie avait tout oublié. Le film était drôle par moments et puis vraiment trop bête. Elle avait sa jambe contre la mienne. Je lui caressais les seins (I, 1139). しかしあきらかに唇への言及が多い。
- 16) Au cours du procès, on l'accuse d'avoir bu du café au lait et d'avoir fumé devant le cadavre de sa mère, c'est-à-dire de l'avoir sucée et mangée (RD, p. 419). Alain Costes の *Albert Camus et La Parole manquante*, Payot, 1973 はピションたちの論を純化し内部の整合をはかったものとおぼしいが、ムルソーからシジフォスへの移行は口唇期からサディック=アナル期への、スキゾイドからマニャックへの移行だとする (ibid., p. 136.)。
- 17) Lui, cependant, s'habilla du mieux qu'il put et, le chapeau à la main, contempla les préparatifs. Il suivit le convoi, assista au service religieux, jeta sa poignée de terre et serra des mains. Une fois seulement, il s'étonna et exprima son mécontentement de ce qu'il y eût si peu de voitures pour les invités. Ce fut tout (MH, 40).

- 18) Et quand Mersault pensait avec tristesse à la disparue, c'était sur lui, au vrai, que sa pitié se retournait (MH, 41).
- 19) マルトはザグルーという両足を失った裕福な男の恋人で、メルソーはいずれ彼を射殺して金を奪う。
- 20) 大地の微笑と良い母のそれとは重なる。また海と空と世界は男性ないし男性性を象徴しうるとともに母を象徴しうる。次の三箇所では世界と海と母の唇との関係がリュシエンヌにとらえられている。もっとも世界は両義的ではある：Devant la nuit (...) et la ville (...) lui venait la soif de cette source tiède, la volonté sans frein de saisir sur ces lèvres vivantes tout le sens de ce monde inhumain et endormi, comme un silence enfermé dans sa bouche (...). Il mordit dans ses lèvres et durant des secondes, bouche contre bouche, aspira cette tiédeur qui le transportait comme s'il serrait le monde dans ses bras (MH, 145).; Et assis sur un rocher dont il sentait le visage grêlé sous ses doigts, il regardait la mer se gonfler silencieusement sous la lumière de la lune. Il pensait à ce visage de Lucienne qu'il avait caressé et à la tiédeur de ses lèvres. Sur la surface unie de l'eau, la lune, comme une huile, mettait de longs sourires errants (MH, 192).; Mersault la regardait parfois. Il songeait qu'après lui, le premier qui prendrait sa taille la ferait mollir. Tout entière dans ses seins elle serait offerte comme elle lui avait été offerte, et le monde continuerait dans la tiédeur de ses lèvres entrouvertes (MH, 200).
- 21) 『幸福な死』のメルソーも同様である：Il fumait ou lisait. Dans le premier cas, sa mère disait:《Encore!》(MH, 41) ただ『幸福な死』の描写が「肯定と否定の間」の対応箇所から派生したなら頻度の証明にはなるまいが。
- 22) Jean Gassin, 《A propos de la femme "automate" de *L'Etranger*》, CAC5, 1982.
- 23) ムルソーの母の死に対する態度を喪 (Trauer) の挫折とみるピジョンたちは、フロイトの「失われた対象を思い出させ、その対象を期待させ、その対象にリビドーが結びついていることをしめす状況ごとに、現実が審判を下す：現実と言う、対象はもう存在しないのだと。そして自我は、失われた対象と運命をともにしたいか否かの決断を迫られ、生きていることの自己愛的状況の総体を考えて、消えた対象との絆を切ることを決心する」(《Trauer und Melancholie》, *Sigmund Freud Studien Ausgabe* Bd. III, p. 209.) との一節に当たる仏訳を示し、カミュの主人公は、この問題に直面して最初の解決法を選ぶので、彼は自分に死刑の求刑をさせるが正確には自殺するのだとかがえ「母の死を感じられず、その死を遂行 élaborer できないがゆえに、失われた対象の運命に従い、自分を殺させる登場人物」とムルソーを規定する。しかし、フロイトの原文に即するならば、喪が病的になり病に陥るといふ言及はあるが、うしなわれた対象への愛ゆえにその対象と運命

を共にするケースは挙げられていない。自殺しうるのは正常な喪と比較されたメラソリーの患者である。とにかく、メルソーが死者の運命にしたがうという解釈はフロイトの文脈では純粋な愛の備給がメルソーの母への感情に見出されるときにのみ納得しうる。メルソーにあてはめるのはいかなるものか。ピションたちは続けて「この喪の仕事の挫折は攻撃欲動が強いことに由来し、攻撃欲動はパラノイド不安の亢進とこの不安への防衛を生む：暴力的な手段による迫害者の破壊と主体への迫害者の回帰」と記しメラニー・クラインの理論につく (RD, *Revue française de psychanalyse*, t. xxiii, op. cit. pp. 415—416)。フロイト的解釈との連関が晦渋である。マリーについては、メルソーと彼女の関係は母の喪失を遂行するところみであり、それが失敗し、この関係はマニャックな防衛の形態を取る (ibid., p. 413) と述べられている。

- 24) Lottman は *Albert Camus* (op. cit. p. 23) で『異邦人』の Marie Cardona に触れ、祖母は Catherine Marie Candona だという。Olivier Todd は Marie ではなく Maria と記す (*Albert Camus une vie*, op. cit. p. 25)。母の両義性といわゆるエディプスは並存しうる。『羨望と感謝』において、口唇期欲動からジェニタル期欲動への変更は口唇期的喜びの与え手としての母の重要性を減じさせ、少年の場合、憎悪のかなりの部分 (a good deal of hate) が母を所有している父に向けられ、典型的なエディプスが成立するとある (*Envy and Gratitude & Other Works 1946-1963*, op. cit., p. 198.)。つまり一部の憎悪ははまだ母に向けられ、愛と並存すると考えられる。
- 26) 女嫌いをネガティブなエディプスに還元しうるかもしれない。おそらく母との同一化とナルシズムにかかわる。Homosexualität については、たとえばつぎに言及がある：Jean Gassin, *L'Univers symbolique d'Albert Camus*, Minard, 1981, pp. 234-248.